

## 『枕草子』における「此君」の享受

——竹に呼びかける意義——

はじめに

『枕草子』に、呉竹の枝にむかつて「この君」と呼びかける段がある。五月の闇夜のこと、殿上人の訪れる声々に、清少納言は応対を命ぜられる。そこに無言で差し入れられた呉竹の枝に思わず呼びかけた言葉が竹の異名でもあることから、宮中で大いに評判になる。しかし清少納言は異名のことを知らないと言いつけるという内容である。

五月ばかり、月もなういと暗きに、「女房や候ひたまふ」と、声々して言へば、「出でて見よ。例ならず言ふは誰ぞとよ」と仰せらるれば、「こは、誰ぞ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」と言ふ。物は言はで、御簾をもたげて、そよるとさし入るる、呉竹なりけり。「おい。この君にこそ」と言ひわたる

『枕草子』における「此君」の享受

## 桑原一歌

を聞きて、「いざいざ、これまづ殿上に行きて語らむ」とて、式部卿宮の源中将、六位どもなどありけるは、いぬ。

頭弁はとまりたまへり。「あやしくてもいぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとしてしつるを、『同じくは、職にまゐりて、女房など呼び出できこえて』と持て来つるに、呉竹の名を、いとく言はれていぬるこそいとほしけれ。誰が教へを聞きて、人のなべて知るべうもあらぬ事をば言ふぞ」などのたまへば、「竹の名とも知らぬものを。なめしとやおほしつらむ」と言へば、「まことに、そは知らじを」などのたまふ。

まめごとなども言ひ合はせてゐたまへるに、「裁ゑてこの君と称す」と誦して、またあつまり来たれば、「殿上にて言ひ期しつる本意もなくは、など帰りたまひぬるぞとあやしうこそありつれ」とのたまへば、「さる事には、何のいらへをかせむ。

なかなかならむ。殿上にて言ひののしりつるは。上も聞しめして、興ぜさせおはしましつ」と語る。頭弁もろともに、同じ事をかへすがへす誦したまひて、いとをかしければ、人々みなとりどりに物など言ひ明かして帰るとも、なほ同じ事をもちろ声に誦して、左衛門の陣入るまで聞ゆ。

つとめて、いとく少納言の命婦といふが、御文まあらせたるに、この事を啓したりければ、下なるを召して、「さる事やありし」と問はせたまへば、「知らず。何とも知らではべりしを、行成の朝臣の取りなしたるにやはべらむ」と申せば、「取りなすとも」とて、うちゑませたまへり。

誰が事をも、「殿上人ほめけり」など聞しめすを、さ言はるる人をもよるこばせたまふもをかし。<sup>①</sup>

この段は、中宮が職御曹司で過した長保元年(999)のことを書いたものとされており、漢籍の知識によつて宮中で評価されたことを自賛した一連の章段の一つとして知られる。殿上人による予想外の試みに対して、故事をふまえて当意即妙の答えをしてみせたことを手柄とするのが章段の中心であるかに見える。ところが、章段中における清少納言は、なぜか故事のことを知らなかつたと言ひ通し、殿上人たちの「取りなし」のせいだと繰り返す。それでいて、この出来事を『枕草子』の一章段として記し留めてもいるのである。

矛盾を含んだままの形をとる当段の背景には、書き記したいけれども明確に書き表せない何かが残されているのではないだろうか。

「おい。この君にこそ」という応答に込められた意図と、その応答の結果、異名のことを知らないとした理由について、故事享受のあり方を見直して考察する。従来日本における漢籍の享受については、風流とされる枠内での享受に限られるものと考えられている。しかし、当段の内容をたどり直すと、故事の趣旨を理解した上で平安中期の貴族の美意識に適う要素を選び出し、風流なものとして利用する過程を見て取ることができると思われる。この点に注目して当段の解釈を新たにし、故事享受のあり方を表現史に位置づけたい。

#### 一 これまでの研究

当段を読むにあたり、晋の王徽之がしばらく空き家(空宅)に住むにも竹を植えさせた折の言葉から「此君」を竹の異名とするようになったことと、「此君」を詠みこんだ白居易の詩句をふまえて藤原篤茂の詩序が作られており、当時の男性貴族達によく知られていたこととの二点は、先行研究に共通する前提といつてよい。ただ、各論の立場によつて、漢籍をどのように扱うかという距離感には違いがある。

当段の記述が明確とはいえない点をめぐつては、これまでも

様々に分析されてきている。先行研究の成果と問題点をまとめる。

古瀬雅義氏は、この段と故事の関連に注目した最初の論を提示されたといえよう。故事の中の言葉である「空宅」が中宮の住む職の御曹司を想起させ、主人である中宮への非礼となりかねないことを清少納言が危惧したとされる。新編全集頭注もこれに従う<sup>③</sup>。そしてその「失敗」から篤茂の詩序へと注意を向けさせたのは、頭弁行成であると指摘されている。

篤茂の漢詩文によるものならば、「空宅」は切り離されて清少納言の危惧は杞憂に終わる。そればかりか篤茂の漢詩文の次句「唐太子賓客白樂天、愛而為我友」まで持ち出すことができ、女房たちと親しく語り明かす口実にもなる。そう決定づけていったこの行成の言動こそ、清少納言の言うところの「行成の朝臣のとりなしたる」ことそのものではないだろうか<sup>④</sup>。

まず清少納言が故事をふまえて発言したとされる点と、この状況では篤茂の詩序の方がふさわしかったことを指摘された点は重要である。だが、「空宅」という語の意味に問題が集約されることには違和感がある。故事の具体的内容については二節で考察することとするが、元の故事の文脈においては、「空宅」は特に落魄や荒廢を意味する言葉ではないからである。それに、「此君」の故事のどの点が不適切で、篤茂の詩序のどの点が適切であるか、積極的な理由

がまだ明確ではない。

土方洋一氏は、古瀬氏の論に対し、王徽之の発言である「何可一日無此君耶」の全体の意味に注意するべきであるとされる。この言葉を、「落飾し、后として内裏にあることがかなわなくなつて久しい中宮の悲嘆を付度し、代弁した、帝に対する心情的つながりの確認を促すことば<sup>⑤</sup>」とされる。それなのに故事を知らないとしたことについては、「一女房でありながら中宮になり代わつて帝への求訴を行なつたと見られては僭上との思いから出た韜晦<sup>⑥</sup>」とされる。表には出ていない故事全体の内容をも視野に入れることを重要とされる点に従いたいが、「僭上」のふるまいを危惧するとの点には不自然さが残る。

坏美奈子氏は、古瀬氏の論に異を唱え、中宮が上の御局を使つていた頃の「御前の呉竹」への懐かしさから呼びかけたものとされた。真心から発せられた懐かしい者への呼びかけであつてこそ「この君」の一句は、王徽之の心情と見事に一致するものとして、しかも単なる引用や模倣ではなく、今宮廷世界におけるこの場に蘇り得るのである。そして、清女のこの一句は、「御前の竹」を折り取つて職の御曹司を目指した殿上人らの《心》に即応するものであつたのだ<sup>⑦</sup>。

清少納言が故事を熟知していたとされる上で、それでも章段は故

事の引用のみによって構成されるのではないという読みを提示される。坏氏の立場は『枕草子』全体を読む上では魅力的である。そして、植物である竹に向かつて親しく呼びかけたことを重視される点、中宮をとりまく政治的状况に注意される点は重要な指摘であると考える。

しかし、故事の存在から離れて当段を読むことは可能なのであろうか。王徽之の言葉に込められているのは懐かしさだけではない。また、無言で差し込まれた呉竹の枝に向かつて、まるで人物に対するかのように呼びかけることは、元来自然な行動とは言えない。懐かしい者への自然な応答というのみでは章段全体を説明しきれないことになる。清少納言の応答は瞬時の間合いを捉えて趣向を凝らした演出なのであり、その意図するところを汲み取るには、故事の趣旨をより深く把握した上で読むことが必要なのではないだろうか。

そして、従来の論には、清少納言が訪れた殿上人たちに対して「なめしとやおぼしつらむ」と配慮していることを重く見るものは特に見当たらない。<sup>⑧</sup>当段の文脈の流れに沿うと、女房として和歌を詠むべきところを、より高度な教養である漢籍の知識を持ち出したため、男性貴族たちが答えに窮したことを無礼ととられるのを危惧したように読める。しかしそれなら他の章段においても漢籍の知識を用いた応答は手柄として評判になっており、無礼と非難された例

はみられない。ここには、異名そのものを知らなかったと言いつけなければならぬほどの「無礼」を危惧する理由があり、その内容は明確に書き表されていないと読むべきである。そのため「此君」の故事を具体的に検討することとする。

#### 一一 王徽之と竹に関する二つの逸話

これまで注釈書等によって指摘されてきた、竹を「此君」と呼んだ逸話を読み直す。

竹を「此君」と呼んだ人物である王徽之の言動は、主に『世説新語』や『晋書』等によって知られる。<sup>⑨</sup>当時の日本の貴族たちは、『世説新語』に限らず他の漢籍からも平行してこの故事を享受していた可能性もある。その記述の違いによって異なる理解がなされていたかもしれないが、本稿では故事の趣旨を確認するために、『世説新語』を中心に検討する。

王子猷嘗暫寄人空宅一住、便令種竹、或問、暫住何煩爾。

王嘯詠良久、直指竹曰、何可一日無此君。〔任誕第二三〕<sup>⑩</sup>  
四六

王徽之が竹を愛したことを有名にした主たる逸話はこの「此君」の話で、これによって「此君」という言葉は竹の異名ともなった。しばらく空宅つまり空き家に住むのに、なぜ竹を植えさせるのかと

いう問いに対して、どうして一日も此の君つまり竹なしでいられようか、と反語で強調しつつ答える。このとき「直に指して」という身振りをつけて目の前の竹を示していることに注意しておきたい。

ここで言う「此君」は、まず竹を他の植物から区別し、君子の徳目を備えた特別な植物としてとりわけける言葉でもある。しかし指示語の「此」が竹と対比させる対象として見落としてはならないのは、むしろ世俗の人間たちであろう。人ならぬ竹を擬人化して、この高潔な君子とは一日も離れられないからわざわざ植えさせる必要があると言ふ。それは君子ぶつた俗物たちとの交際ならばいつまでも絶つていられるという皮肉を強調するための表現である。住む家が「空宅」とされる必然性もそこにある。誰かの住む家を訪ねて泊まるのも、新たに転居するのでもなく、他人の空き家に仮住まいをするから俗物にわずらわされずにすむ。「此君」は、毒を含んだ逆説的な機知から生まれた故事であるといえる。

王徽之が竹を愛したことを語るもう一つの話も、同じ趣旨によるものである。

王子猷嘗行過<sub>二</sub>吳中<sub>一</sub>、見<sub>三</sub>一士大夫家<sub>二</sub>、極有<sub>二</sub>好竹<sub>一</sub>。主已知<sub>三</sub>子猷當<sub>レ</sub>往<sub>二</sub>、乃灑掃施設<sub>一</sub>、在<sub>二</sub>聽事<sub>一</sub>坐相待、王肩輿徑造<sub>二</sub>竹下<sub>一</sub>、諷嘯良久。主已失望、猶冀<sub>二</sub>還當<sub>レ</sub>通<sub>一</sub>、遂直欲<sub>レ</sub>出門。主人大不堪、便令<sub>二</sub>左右閉<sub>レ</sub>門不<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>出<sub>一</sub>。王更以<sub>レ</sub>此賞<sub>二</sub>主人<sub>一</sub>、乃留坐、

『枕草子』における「此君」の享受

盡<sub>レ</sub>歡而去。(「簡傲第二四」一六。)<sup>①</sup>

王徽之の來訪を聞き、もてなそうと待ち受けている主人を無視し、あえて引き止められて初めて対面したという様が語られている。主人がもてなしを準備していたのは形式上の礼としてではなく、心を尽くして面会を望んでいたことを知ってはじめて王徽之は態度を改める。ここから、他人の家にある竹までも賞翫することに執着し、その家の主人への礼を損なうことも辞さない、むしろことさらに無視してみせるという極端な様子が読み取れる。二つの竹の逸話に共通する「嘯」は神仙術的な動作とされていて、これにも老荘の境地への憧れがうかがえる。

『世説新語』には、このような脱俗志向による士大夫たちの言動が数多く記されている。篇目名の「任誕」は、気ままに世俗の礼法にこだわらずにふるまうことであるし、「簡傲」もおごりたかぶつて世俗の権威や礼を無視することを意味する。六朝期の「風流」もこれに近い意味を持ち、士大夫たちのふるまいを特徴づけている。王徽之が憧れていた竹林の七賢をはじめとして、他の士大夫たちも儒教を基礎とする教養を身につけていながら、あえて極端な言動をとり続ける。王徽之の「此君」の逸話の注にも、行きすぎた言動が批判を受けていた様子がうかがえる。

中興書曰、徽之卓犖不羈、欲<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>傲達<sub>一</sub>、放<sub>二</sub>肆聲色<sub>一</sub>頗過度。時



章段においても読み取れるが、本稿では「此君」のみを考察することとし、他章段については今後の課題としたい。

しかし、この当意即妙の対応は諸刃の剣ともなる。王徽之の発言に込められた皮肉のように、竹と人とを対比して考えるとすれば、呉竹の枝のみが親しみを向ける対象となり、訪れた殿上人たちのことは俗物扱いすることになってしまう。「なめしとやおぼしつらむ」は、「おい。この君にこそ」という応答に対して明確な解釈も評価も下さずに退散した殿上人たちの受け取り方に対する危惧を示している。風流な竹の異名を用いた気のきいた答えにとられたのか、形式的な礼にとらわれ、権力に媚びる俗物と皮肉った無礼にとられたのか、その行方は清少納言のみならず、主人の中宮にとっても重大なものとなる。故事の世界に肉薄する表現を試みたからこそ「失言」である。

ではこの時期に中宮定子が置かれた政治的状況と合わせて考える。中宮が職御曹司に住んだのは、長徳三年(966)六月から長保元年(969)八月までの二年余りであった。当段は、長徳四年か長保元年のいずれかの五月の出来事となるが、官職呼称の考証から長保元年五月のこととして読むのが通例である。この時中宮は一条天皇との第二子である第一皇子敦康親王を懐妊中で、この後八月に大進生昌の家に退出し、十一月七日に出産する。一方、この年の二月に左大

臣道長の娘彰子は十二歳で裳着をすませており、十一月一日に入内、定子出産と同日の七日に女御となる。翌長保二年、皇后とされた定子は、第三子である第二皇女媛子の出産により、十二月に二十四歳で崩御する。職の御曹司にあつた懐妊中の中宮は、政治的にはすでに孤立無援の弱者といわざるを得ない。呉竹を素材に和歌を詠むためとしても、職の御曹司を訪れた殿上人たちには場に適ったあいさつを返す必要がある。動かしようのない時勢の変化の中で、殿上人たちを俗物扱いする皮肉にとられる危険を含む発言は、中宮方の女房として決して許されない「失言」であったのである。

殿上人たちのうち、清少納言の「失言」への懸念を誰がどこまで理解したかは定かでない。結果的に彼らは、女性でありながら男性が朗詠する詩文を知っていたという点を称賛し、「此君」の故事に深入りせずに、藤原篤茂の詩序の一部を繰り返し誦すという方向に問題を置き換えてゆく。その場に残っていた頭弁行成が果たした役割も大きく、清少納言が「此君」の故事を知らなかったと言いつける後押しとなっている。行成の発言の「人のなべて知るべうもあらぬ事」は、清少納言が王徽之の逸話の趣旨まで理解しているかどうかを確かめようとしたものではないだろうか。ただ竹の異名が「この君」だという無機的な知識や間接的な享受では、臨場感ある応答を行うことはかなわなからである。清少納言が知らないと言いつ

つも殿上人たちに「なめしとやおぼしつらむ」と思われることを危惧していることを受けて、行成は話を合わせる方向に動いたのであろう。<sup>17)</sup>

では、藤原篤茂の詩序に拠るならば、引用の内容がどう変化するかを確認する。

『本朝文粹』巻一「321 冬夜守庚申同賦修竹冬青応教」

藤篤茂

夫守庚申者、玄元聖祖之微言也。世揚其余波、人伝其遺跡。或至此夜、不眠達明。於是開紅炉、命緑醕、左絃管、右詩篇。鸞吟鳳唱之音、過夜雲而更怨、嘲風睍月之思、对曉灯而猶高。蓋斯大王樂善之佳遊也。觀夫籬下有修竹、架中無凡叢。迎冬独青、欲咲彼千秋之紅葉、経霜弥緑、自立此一庭之白沙。蕭颯入聽、簾外之雨天霽、蒙籠遮眼、窓間之煙暮寒。凡竹之為物也、藍羅剪葉、碧玉抽竿。晋騎兵參軍王子猷、種而称此君、唐太子賓客白楽天、愛而為我友。既而虬漏頻催、蠟燭將尽。壺中之天欲曙、象外之樂豈荒篤茂沢畔截蒲、昔慙庸才之已拙、洞中对竹、今闕貞心之不移。聊走醉後之毫、以謝座右之客云爾。<sup>18)</sup>

この詩序全体を殿上人たちが熟知していたかどうかは別として、この詩序の性格と、そこに表現されている竹のあり方とを見直した

い。後藤昭雄氏によると、この詩序は庚申の夜に詩宴を主宰した親王の命に應えて作られたものである。当時庚申は作文の場として機能していたもので、この詩宴は「冬の寒さに耐える竹の緑をテーマにし」たものとされる。<sup>19)</sup> 詩序の内容は、君子としての美質を備えた竹の貞潔さを中心に表現している。冬も色を変えない様を色彩感豊かに描いており、植物としての美しい姿を叙景的に表す。これによって擬人化されてはいても、俗物と対比されていた印象は弱まる。

また「此君」についても、王徽之と白居易とを対にすることで、中国の著名な人物が親しんで愛好したという面を強調し、王徽之の発言にあつた皮肉はほとんど消えてしまっている。白居易が竹を「我が友」としたという句と並置されたことは、「此君」の理解に影響を与えたであろう。後に『和漢朗詠集』にこの部分が採られているが、それでも竹そのものを讃えるというよりは、著名な人物が愛した風物であることに興味の中心があるように読める。最後に詩宴の主宰者である親王の庭を仙境に喩え、貞心を竹と競うと述べて詩序は結ばれる。

この詩序を誦すことにしても、同じ故事をふまえているから「失言」を取り消すことにならないというのではなく、やはり「此君」の故事から篤茂の詩序に注意を向けることに、「取りなし」としての大きな意味があると言える。それは単に無難な別の言葉に取り替

えたというにとどまらない。殿上でも評判となり、帝も興じたほどであると記述があるように、章段の後半は君臣和楽の体現された理想的な宮廷において、中宮方が知性の中心としての位置を保ちつづけているかのように描き出されている。呉竹の枝とともに訪れた殿上人たちは中宮方の「友」のようにふるまい、帝と中宮への貞心を抱きつづ繰り返し声を合わせて詩句を誦し続ける。篤茂の詩序にはこの場での竹の意味を方向づける機能がある。俗物への皮肉を想起させるものから、色を変えずに貞心を抱く「我が友」へと変化をさせるのである。行成をはじめとした殿上人たちの協力を得て、清少納言の「失言」はあらわになることなく隠される。「取りなし」とは、「この君」という呼びかけを場に適った応答に解釈するための共同作業である。『枕草子』当段では、最晩年の中宮方は、決して孤立した存在ではなかったものとして構成されているのである。中宮は「失言」の真相を推察していそうであるが、殿上人たちの働きに対して満足する理想的な主人として描き出されて章段はとじめとなる。

呉竹の枝が差し入れられるという瞬間を捉えて相手方が想定する和歌などよりも格段に優れた応答をしてみせたという自負が、当初の清少納言にはあつたであろう。しかし殿上人たちに立ち去られてみると、政治的な危険を含むとともに、貴族社会の美意識からも大

『枕草子』における「此君」の享受

きく逸脱していることが気になってくる。発言を修正するには、自らは異名の知識すらなかったことにして、行成や殿上人たちの「取りなし」の方を理想的な形で描き出した。風流なやりとり置き換えるはたらきを、中宮方を称えることへとつなげてゆく。このような背景があるために、当段の表現は一見矛盾の目立つ記述になったものと考ええる。

#### 四 表現史の問題として

毒を含んだ故事として「此君」という言葉が生まれたものの、風流な竹の異名としての意味が選り取られてゆく。このような享受のしかたは平安時代の散文作品の表現史にどのように位置づけることができるだろうか。

漢詩文においては「此君」を引いた例が見られ、表現方法が受け継がれていたといえる。中国では白居易、日本では菅原道真などの作品に特徴的な形で用いられている。それに対してかなの散文には故事「此君」をふまえたと思われる記述はなかなかみつかからない。

人物を指示する言葉としての「この君」は散見されても、故事と関連すると思われる『枕草子』以前の例は現時点では見られない。かなの散文作品で最も早いものが『枕草子』「五月ばかり、月もなういと暗きに」段の中で呼びかけによるものと考えられる。植物に

対して呼びかけるといふ形式は、もともと漢詩に見られるものである。<sup>24)</sup>和歌にも別の形式として少々例はある。しかし、故事の世界と疑似体験でつながり合うかを感じる臨場感をもたらすのは、差し入れられた呉竹の枝にむかって「とっさに」呼びかける、その場のやりとりをもってはじめて可能となったことである。これは漢詩文や和歌とは異なる、散文の随筆作品の特性を生かして実現したことで、「此君」を用いた表現の可能性を大きく開くこととなった。ただ、『枕草子』の章段内部ではこの応答は危険が大きすぎるあまり、書き記していながら否定するという姿をとらざるを得ず、「取りなし」の方に焦点をずらすことで章段の形を保ったのである。

では『枕草子』以降ではどうだろうか。『源氏物語』の人物を呼称する「この君」のうちに、「此君」をふまえた形で用いられているものがあることを考察した。<sup>25)</sup>『枕草子』と『源氏物語』のいわゆる二部世界との成立時期の差は、数年から十数年の近い時期であろう。そこでは『枕草子』とは異なる物語作品の特性を生かした表現方法がとられている。直接的には人物呼称として用いられるのであるが、物語中の詠歌や景物の描写、登場人物の造型等と組み合わせられ、薫の在りようを幼児期から規定する言葉として機能していると考えられる。しかし、現時点では『源氏物語』以降、かなの散文作品に「此君」の故事が生かされた形跡は見られない。『源氏物語』の注釈

書にも「此君」に関する指摘は見当たらず、表面的には関連が見えないままになっていた。その中で、たとえ「失言」であったとしても、王徽之の「此君」の故事をふまえて呉竹の枝に呼びかけたことが記されている『枕草子』の存在は大きい。現在知られる範囲では、故事「此君」の趣旨を生かした形でかなの散文作品に享受されているのは平安中期の『枕草子』と『源氏物語』の二作品のみと考えられる。

一方、和歌の世界では、竹の異名としての「この君」が平安後期の詩序の句が、『堀河百首』を通して受け継がれていったものと考えられる。したがって「此君」に王徽之が込めた皮肉から大きく離れた道を取り、時代とともに言葉の意味を変遷させつつ南北朝期ごろまで詠歌の例をたどることができる。同じ篤茂の句からは、白居易が竹を「我が友」としたという流れも受け継がれ、むしろ「此君」よりも広く受容されてゆく。

漢籍を享受する際に、日本では定着しにくい要素が様々にある。王徽之が「此君」に込めた皮肉もその一つといえるだろう。いわゆる日本の享受のあり方としては、この皮肉のような癖の強さを回避する方法がいくつか工夫されてきている。例えば竹の異名として、受容しやすい要素のみを抽出して用いること。篤茂の詩序のように、

興味の対象をずらすこと。また言葉の意味自体を変化させることもしばしばである。いずれにしても、もたらされた漢籍から日本になじむ要素のみを濾過して受容するという視点が貴族たちの念頭にあり、知的な応酬のために緊張感をもって練り上げられる場もあったという様が垣間見えたのではないだろうか。実際には個々の意識や教養にかなりの開きがあると思われるが、その中で清少納言はあえてためらうことなく表現の冒険に乗り出し、完全な成功とはいえない結末も含めて書き記そうとしたのが当該段であると考えたい。

かなの散文作品で故事の趣旨を変質させることなく享受し、表現に生かしてゆくには、独自の表現方法が必要とされる。『枕草子』「五月ばかり、月もなういと暗きに」段の故事「此君」享受は、意義のある試みであったと考える。

## 結 び

『枕草子』の「五月ばかり、月もなういと暗きに」段を、故事の趣旨に留意して読み直せば、清少納言の危惧した「失言」の内容が浮かび上がってくる。この段を分かりにくくしていた要因は次の二点が考えられる。まず故事「此君」の趣旨を生き生きと蘇らせようとする、そこに含まれていた王微之の皮肉や奇行までもが生々しく現れてしまうという扱ひにくさがある。そして職の御曹司に定子

『枕草子』における「此君」の享受

が住んだ時期に、中宮方の女房として必要とされた配慮がある。無難な応対の方法は幾通りもある。それでもこの出来事を書き留め、知的な表現を追い求めることを『枕草子』はやめようとする。かなの散文による表現方法の可能性を考えさせられる章段である。

## 注

① 『枕草子』（松尾聰・永井和子校注・訳『新編日本古典文学全集 枕草子』一三二段、小学館、一九九七年一月二〇日、二四七～九頁）本文は三卷本系に拠る。引用文中の故事「此君」にかかわる語句に傍線を、また登場人物たちの意図がうかがえる箇所には波線を付した。

② 古瀬雅義「この君にこそ」という発言―典拠の「空宅」と清少納言―（『国語と国文学』七四卷二号、一九九七年二月）

③ 前掲注①に同じ。

④ 前掲注②に同じ。

⑤ 土方洋一「擬制の恋愛―『枕草子』における藤原行成の役割―」（『青山語文』第三三号、二〇〇三年三月）また、土方氏は、「詠まれなかった和歌―枕草子解説―」（『青山語文』第三二号、二〇〇二年三月）において、清少納言の行動を「パフォーマンズ主義」とされている。当該にもあてはまる点があると考ええる。

⑥ 前掲注⑤に同じ。

⑦ 坏美奈子「第四節 子猷伝説―「此君」―」（『新しい枕草子論 主題・手法そして本文』第四章、漢籍故事に拠る言説における表現差、新典社、二〇〇四年四月二七日）。また当該において、平安中期に享受されていた「蒙求」には、故事「此君」の記述がない点についても指摘し、

古瀬論を批判されている。

⑧ 近年の研究に、中田幸司「枕草子」五月ばかり、月もなういと暗き  
に「章段攷」「呉竹」の機能と〈知的な遊び〉——(玉川大リベラルア  
ーツ学部・研究紀要)一号、二〇〇八年三月)もあるが、殿上人への配  
慮を重く見るものは特にならうである。

⑨ 王徽之は、生年は不明であるが三八八年頃没したといわれ、東晋の書  
聖として有名な王羲之の五男、字は子猷である。四世紀半ば以降に会稽  
などの江南の地を中心に活躍したとされている。当時の世相や士大夫の  
交遊については、吉川忠夫『王羲之——六朝貴族の世界』(清水書院、一  
九八四年九月二五日)などがある。

⑩ 本文は、『景印文淵閣四庫全書』(「任誕第三三」四六、台湾商務印書  
館)により、以下編目名と番号のみを挙げる。訓点は、目加田誠『新釈  
漢文大系 世説新語(下)』(明治書院、一九七八年八月二五日)を参考  
にした。また字体を改めた箇所がある。

⑪ 前掲注⑩に同じ。他人の庭園を賞翫することについては、王徽之の弟  
である王献之の逸話もある。面識のない人物の庭園で傍若無人に振る舞  
い、ついに主人の怒りを買ったが、平気な様子だったという。(「簡傲第  
二四」一七)

⑫ 船津富彦「魏晋文学における嘯傲について」(『東洋文学研究』一一号、  
一九六三年三月)

⑬ 『世説新語』は六朝期の、宋の劉義慶による小説である。後漢末から  
魏晋にかけて活躍した士大夫の逸話を篇目別にまとめている。日本には  
上代から『世説』として入っていたとされている。今浜通隆「此の君」  
雑考——平安朝文学と『世説』序章——(『池田富蔵博士古稀記念論文集  
和歌文学とその周辺』桜楓社、一九八四年一月)をはじめとした一連の  
論考がある。当時の『世説』については、今浜氏「仁和元年二月二十五

日基経邸読書始について(上)」「(『武蔵野日本文学』二号、一九九三年  
三月)に考証されている。故事「此君」の日本への伝来については、今  
浜氏「日と都といづれぞ遠き」考(下)」「(『武蔵野日本文学』九号、二  
〇〇〇年三月)で「未詳」としながらも考察された。これらにおいて、  
士大夫たちの老荘への憧憬が形骸化していたことが指摘されている。ま  
た、竹林七賢の受容については、蔵中スミ「田氏家集と「竹林七賢」  
詩」(『大阪私立短大協会昭和47年度研究報告集』九号、一九七三年三  
月)や、後藤昭雄「嶋田忠臣論断章」(『平安朝文人志』吉川弘文館、一  
九九三年一月。初出『語文研究』六〇号、一九八五年二月)の論考  
がある。

⑭ 前掲注⑩に同じ。また、『晋書』「列伝卷五〇 王羲之」にもこれらの  
記述があり、日本でも享受されていたと考えられる。

⑮ 桑原一歌「薰と「此君」——愛好の対象としての竹——」(『和漢比較文  
学』三八号、二〇〇七年二月)で、白居易の詩の用例についても検討し  
た。

⑯ 田中幹子「三「子猷尋戴」説話」(『和漢・新撰朗詠集の素材研究』第  
二章 説話からの考察、和泉書院、二〇〇八年二月二五日。初出「子  
猷尋戴」説話の日本文学における受容の変遷」『和漢比較文学』七号、  
一九九一年六月)、田中氏「和漢朗詠集」所収詩句の説話的背景」(『札  
幌大文学部・比較文化論集』一八号、二〇〇六年九月)

⑰ 前掲注⑤に同じ。行成の役割について考察されている。

⑱ 大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系 本朝文  
粹』(岩波書店、一九九二年五月二八日、三二二頁)表記は改めた箇所  
がある。なお、白居易の句として「我が友」と引用されているのは「我  
が師」の誤りで、そのまま「和漢朗詠集」にも引かれているとの指摘が  
ある。川口久雄・志田延義校注『日本古典文学大系 和漢朗詠集』梁塵

秘抄』(岩波書店、一九六五年一月六日、一五九―六〇頁頭注) その後、和歌の世界へも「我が友」の形で引用され続けてゆく。

⑲ 後藤昭雄「第三章 庚申を守りて「修竹冬に青し」を賦す詩の序(藤原篤茂)」―詩文の作られる場(三) 庚申の夜』(『本朝文粹抄 二』勉誠出版、二〇〇九年二月二〇日、二九頁)

⑳ 菅原道真の詩に「此君」は五例みえるが、これについて島田忠臣との関連もうかがわせる論として、後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩」(前掲『平安朝文人志』初出『香椎潟』二七号、一九八二年三月)がある。

㉑ 植物に語りかける形で心情を表現することについて、波戸岡旭「第五章 花に語りかける詩人―菅原道真と白居易」(『宮廷詩人 菅原道真―菅家文章・菅家後集』の世界―、本論第二編 菅原道真と雪月花、笠間書院、二〇〇五年二月二八日。初出、「アジア遊学」No.2、一九九九年三月)があり、『白氏文集』との共通点が指摘されている。このような表現上の特色についても今後の課題としたい。

㉒ 前掲注⑲に同じ。

㉓ 「この君」という言葉を詠む和歌については、桑原一歌「竹の異名の詠歌―「此の君」の変遷―」(『古代文学研究 第二次』一四号、二〇〇五年一〇月)で『萬葉集』から南北朝までの例を概観した。竹を詠む和歌全般については、百留恵美子「竹(タケ)の表現性と枕詞のレトリック展開」(『文化』(東北大学文学会) 六八巻一・二号、二〇〇四年九月)、百留氏「竹」における概念領域と和歌表現史」(『文芸研究―文芸・言語・思想―』(日本文芸研究会「東北大学」)、一五九集、二〇〇五年三月)がある。